

# 東方摩耗録 連載

力尽きても復活した奴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——もう俺は一人じゃない。君がそう教えてくれた。それで救われたんだ。

ここは全てを受け入れる素敵で残酷な場所。  
人の存在も、妖怪の存在も受け入れる。  
そして、大切な人の死さえも。

——だから俺は、諦めない。

これは受け入れられなかった男の時を翔る物語。

前回の感覚でチラ裏にできてしまったのを直しました。  
タグに独自解釈を追加します

目次

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
31	26	20	14	8	1

## 第1話

山の中、薄暗い獣道を歩く一匹の妖怪がいる。

その妖怪の外見は少女とほぼ同じ見た目であり、茶色のショートヘアで緑色の帽子を被っていて、服は赤を基調としたワンピースで袖とスカートは白く胸元にはリボンが着いている。

そして、彼女が一目で人ではないと分かる特徴的な部分がある。黒い猫耳と同じ色の二本の猫の尻尾である。

猫の妖怪であるその少女は青い布の袋を抱えており、邪魔になつて  
いる枝を鋭い爪で切り落としながら進んでいく。

そうして獣道を進むこと十数分、多くの猫がくつろいでいる小さな  
廃村に辿り着いた。

そこは猫の楽園。種々様々な猫が自由気ままに暮らし、他者に踏み  
荒らされることの無い空間。

そんな場所に着いた少女は抱えていた布からマタタビを取り出し、  
不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ。今日こそ忠実な配下を得て、藍さまにいっぱい誉めてもら  
うんだから！」

猫の妖怪の手下を獲得する戦いが、今ここに始まる。

「どっだ、(ハハ)……?」

気が付いたら知らない場所にいた。

意識を失う前は湖にいたはずだ。少なくとも木や草が生い茂るような所ではなく、周囲に人がいないために連れてこられた訳ではないだろう。例えば誘拐犯が人がいたとしてもこんなところに放置する理由もないはずだ。

少し意識がぼんやりとしながらも辺りを見回す。

見渡す限りの木。道すら確認出来ず、傾斜があることから丘や山の通りから逸れた場所なのだろう。人影がないのは都合がいい。

あまり荷物は持っていないかったが、時計型通信機のT2 phoneは左腕に身に付けていたため、猫の保護シールがついたパネルを二本指で二回タップして、空中投影ディスプレイを起動する。

日付は2035年4月5日9時43分と表示されており、気を失う前から一日も経っていないかった。

地図を呼び出しても現在地が表示されない。電波も届いていないために電話は出来ず、ネットに繋げることも出来ない。

「GPSが反応してない。本当に何処なんだここは」

呟いた言葉は、そよ風に揺れる頭上の葉のさざめきと同化して消える。

ゆっくりしていたところで何も進展しない。そう思った俺は地図の移動履歴機能をオンにして、取り敢えず下る方向に歩き出した。

しばらくは代わり映えのしない木々の間を草や枝を掻き分けながら進んでいく。

「っ！ 行ってえ……」

枝の先が引つ掛かり、服が少し切れて血が滲む。

「くそっ、もう少し気を付けて進むか」

気付かずに焦っていたのだろう。段々と速くなっていた歩くペースを下げ、ゆっくりと進んでいく。

数分の間何事もなく進んでいると、ふと後ろの方からガサガサと音が聞こえ出した。

正確な位置は分からないが、恐らく怪我をした方向から聞こえている。

体制を低くして様子を窺う。姿の視認は出来ず、音も聞こえない。

状況から考えると野生の動物だろう。最悪の場合飢えた相手に襲われる可能性があるかと判断して静かにその場から離れる。

慎重に離れていくなか、唐突に木がざわめいた。

突風だった。低い体制だったのが幸いして体制を崩すことはなかったが、風の向きは音がした方向からで――

ミツケタ

怖気が全身を支配するよりも先に走り出していた。

ソイツは獣よりもおぞましい咆哮を上げて走り出す。

後ろを振り向いても姿は見えない。

しかし、音の発生源はどんどん近付いていく。

このままでは追い付かれる。それは嫌だと必死に走ると、地面は踏み固められ枝もあまり延びていない獣道に出る。

直ぐに下ろうとするも、その先にはナニカが飛んでいるのが見えた。

即座に反転して駆け上る。

茂みから飛び出す様な音が聞こえて振り返る。否、振り返ってしまっただ。

遠くからであれば大型の犬にも見えるだろう。しかし、この短い距離であればはつきりと違いがわかってしまう。

様々な大きさの複数の目、耳まで裂けた歯が剥き出しの口、6本の脚。

ソイツの表情が嗜虐心に塗れているように見え、息が絶え絶えになりつつも喰われるだけでは済まないだろうという想いが足を動かす。

走り続けていると、ふと気が付く。先程までの速さであれば既に追いつかれていてもおかしくないはずだと。

そう思い少しだけ後ろを確認すると、嗤うのが見えた。完全に遊ばれていた。が、どうすることも出来なかった。止まっただ

ら飽きて見逃してくれるなんてことは無いだろう。捕まったらどうなるのか何て考えたくもない。

酸欠でぼんやりとした意識のなかそう思っていると、気付いた時には明るい開けた場所に出ていた。

周りには朽ちた家があり、人の気配は無かった。後ろを見ると、異形の犬モドキが走る方向を変えた。

このタイミングでこちらから離れる理由は分からないが、この隙に出来るだけ距離を空けようと視線を前に戻そうとしたとき、近くの廃屋の影で数匹の猫が震えているのが視界に入った。

「嘘だろっ！」

嫌な予感がして犬モドキの向かった方を見ると、猫が慌てて逃げ出していくのが見えた。

慌てて犬モドキを追いかける。

自分が連れてきてしまった。

見捨てる事は出来なかった。

それに何よりも、俺にとっては猫は大切な存在なのだ。

独りだった俺に妹が遺してくれた、唯一傍に居てくれた黒猫。

彼女が居なければ俺に幸せな最後の時間は存在しなかった。

近くに落ちていた木材を引つ掴んで走る。

「クッソオオオオ！ ふざけんなこの化物がア!!」

犬モドキがイラついたようにこちらを向く。

間に合え

数匹の猫が此方に逃げこむ。

恐れるな

犬モドキが俺に飛び掛かる。

奴を倒せ

木材を掲げ、狙いを定める。

集中しろ！

体全体を使って振りかぶり、

奴の顔を全力で打ち抜いた。

『ガッ!?!』

犬モドキは殴られた勢いで後ろに着地する。

その姿に怯んだ様子は見受けられず、ダメージも無さそうだった。「どんだけ頑丈なんだコイツー!」

飛び掛かりに備えて木材を構える。

犬モドキを見据えていると、その体が震えているのが分かった。

同時に、凄まじい程の怒気が放たれているのを感じた。

『エサノブンザイデ、アラガツタナ』

ひどく不快になるしゃがれた声で、人の言葉を話した。

「なっ、喋った!?!」

『ダメレ』

たった一言で体が動かなくなる。それはまるで金縛りにあつたかのように、目をそらすことも出来ない。

『タノシマセテクレタレイニ、アマリ苦シマナイヨウニ殺シテカラ喰ツテヤロウトオモツタガ、キガカワツタ。イキタママ喰ライ尽クシテヤル』

ソイツは六本の脚を曲げて体制を低くして、多数の目を厭らしく細めると、口を大きく開けて飛び掛かってきた。

「うーん。今日もついてきてくれる猫は見つからなかったなー」

今日一日の成果はなく、自分の行動を見つめ直す。

先ずはマタタビを与えて関心を集めて、自分の下につく利点を説い

た。

その後は追いかけてつこ等で遊び、廃屋に保存してある餌を与えて、一緒に昼寝をすることで友好を深めた。

そして配下になるかを問えば、みんな知らんぷり。

特に行動に間違いは無かったはずなのに、何故駄目だったのだろうか。

もっとマタタビの量を増やした方がいいのかな。

そう思ったその時、嫌な気配が廃村の結界内に侵入したのを感じた。

この結界は外部からの認識を阻害するもので、侵入者がいれば内部に教えてくれるものだ。感じる存在は二つ。

外敵に敏感な猫たちは各々隠れているが、侵入者に近い者は危険だ。

跳ぶように駆け出した。

「なんで反対側なのっ、急がないとー！」

みんな友達で未来の仲間なのだ。そして今はまだ力が無い普通の猫、妖怪相手じゃ一分も持たない。守らなければならぬ。

全力で駆けていくと、遠目に一人の男が犬の姿をした妖怪に向かって何かを打ち付けるのが見えた。

その男の後ろには、怯えている猫がいた。

嬉しさが心が溢れる。自分の命も危ういというのに、力も無いただの人間が友達を守ってくれていた。

妖怪の様子が変わる。

だけど、問題はない。

手足に妖力を溜めつつ走る。

——時間を稼いでくれてありがとう

妖怪が飛び掛かる。彼は動かない。しかし、確実に巻き込まないためにはむしろ都合が良かった。

溜めた力を解放し、妖怪目掛けて宙を飛ぶ。

仲間を助けてくれた彼はもう——

「私の仲間に出すなあああああ!!」

友達だ。

## 第2話

不思議と恐怖は無かった。ただただ苦しんで死ぬんだなと諦めていた。

ソイツから目を離すことも出来なかった俺は、叫びと共に跳び蹴りをかます少女の姿をみた。

『アガッ!!』

異形の犬は十数メートルほど吹き飛び、少女は一回転して目の前に着地する。

「後は任せて」

こちらを見ることなく少女は異形の犬へと飛び掛かった。

飛び起きたソレは少女へと牙を向けるも、出来たことはそれだけだった。

少女に顔を切り裂かれて首を蹴り上げられたソレは、なす術もなく晒した胴体を真つ二つにされる。

その後二度と動くことはなくなった。

振り返る少女。未だ混乱しながらもその少女に見惚れる。

まだあどけなさを残すその容姿。それに動く猫耳とちらちらと体の影から姿を表す尻尾。

その耳と尻尾は最後の家族だった彼女によく似ていた。

「大丈夫?」

呆然と少女を見ていると心配そうに声をかけられる。

「あ、ああ」

「そっか。よかった」

何とか声を絞り出すと、安堵の言葉と笑顔が向けられる。

少女の目が怪我をした腕の方を向いた。

「怪我してるね。手当してあげるから、こっちにきて」

「ん」

返事を聞いて廃村の奥へと歩みだす少女についていく。

庇った猫たちは後ろを着いてきて、瓦礫などの陰から多くの猫が見つめてきていた。

「みんなを庇ってくれてありがとう」

「いや、そんな。そもそも俺が連れてきてしまったんだ。こちらこそ助けてくれてありがとう」

お礼をいう彼女に慌てて礼を返す。感謝しなければいけないのはこちらなのだから。

「そう？　んー、うん。それでもありがとう。見捨てて逃げることだって出来たんだもの」

俺の言葉を聞いて少し考えた少女は納得したようにうなずくと笑顔で答えた。

笑顔の彼女に手を引かれて比較的形の残ってる廃屋に入ると、棚をあさって救急箱を取り出した。

「じゃあ水を汲んで来るからちよつとだけ待っててね」

そう言つて、たらいを抱えて出ていった。

周りの猫たちがみゃーみゃー鳴いていて、正直煩くもあるが癒される。

すり寄ってくる猫を撫でながら待っていると、戻つて来た少女が驚いたような表情で耳と尻尾をピンとたてる。

「あー！　私よりも懐いてるー！　何で!?!」

「あはは……」

何と反応したら良いのか分からず、曖昧な笑顔でごまかす。

「好かれる秘訣を後で絶対教えてもらうからね！　じゃあはいっ、そこに横になってね」

言われた通りに横になる。

「あまり見ない服だけど、あなたは外の人間？　幻想郷って分かるかな？」

手当てをしながらも彼女が話しかけてくる。

「外？　幻想郷は……初めて聞いたと思う」

「じゃあそこから説明した方がいいのかな」

少女はしばらく考えてから口を開いた。

「えつとね。ここは幻想郷って言つて、貴方のいた外の世界とは隔絶された場所なんだ」

「隔絶された場所？」

「うん。結界によって区切られた、外では否定されたり忘れ去られた存在が住む場所。さつき襲いかかってきたのが妖怪だね。それにも妖怪だよ」

確かに普通では信じられない話だが、さつきの化け物や目の前の少女を見た後だ。もはや信じるものにも無い。

「なら、何で俺はここにいるんだろう。隔絶されてるなら簡単には行き来できないんだろ？」

「うーん、考えられる可能性はいくつかあるかな。存在を忘れられたか否定された存在がたどり着く、結界の綻びに偶然迷い混んだ、移動能力を持つ変なものに引きずり込まれた。聞いたことがあるのはこの三つかな」

「じゃあ俺は皆に忘れ去られたのかもな」

自嘲気味に笑う。

「人間がその年で全ての人から忘れられることはそうそうないはず何だけど」

「俺の事を気にかけてくれた唯一の家族が一ヶ月前に死んじゃったからな。他に知り合いもいなかったし」

「そっか……」

少し暗い空気になってしまったが、話を続ける。

「その家族は猫だったんだけど、結構歳でさ。眠るように旅立ったんだ」

「猫と家族だったの？ 大切に思ってくれてたんだね。なんだか嬉しいな。ほら、私も猫だから。化け猫だけど」

「うん、大切な家族だった。黒い猫で、耳と尻尾が君に似てたな」

「どんな子だったの？」

優しく問いかけられ、どんどん思い出が甦る。

「やんちゃだった」

死角から急に飛び掛られる事が多かった。

「嫉妬心も強くてさ」

本やテレビに夢中になると、破かれたり消されたり。

「手はかかったけど」

怪我也絶えなかったけど

「辛いときにただただ傍にいてくれる様な奴だった」

ずっと助けられていたんだ

気付いたら涙が出ていた。彼女が死んでから一度も泣いたことはなかったのに。

頭を撫でる感触があった。もう誰かの温もりを感じることは無いと思っていた。

俺はもう一人で誰にも気づかれずに消えていくのだと思っていた。

ひとしきり泣いたあと、膝枕をされて撫でられていた体を起こして少し離れた。無言で。

「ふふっ、照れなくてもいいのに」

うっさい。

「ねえ、その子の名前聞いてもいいかな？」

「いいよ。ちよっと待ってね」

T2 phoneを出し、漢字を表示させた。

「トウ、っていうんだ。妹が付けた名前なんだ。黒猫なのに変だよな」  
その字を見た少女は目を丸くしていた。

「……どうかした？」

「ううん、ちよっと驚いただけ。良い名前だと思う」

そう言って彼女は微笑んだ。

「そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は儂意はかない 時命ときさだ、よろしく」  
「私は橙ちえん。貴方の家族の猫と同じ漢字なんだ。よろしくね」  
彼女は満面の素敵な笑みを浮かべていた。

「そういえば、これからどうするの?」

しばらく話しあつた後、外を見た橙が話を交える。

これからの事を考えようにも、外の世界に戻る気もなければここにいてどうなるわけでも無かつた。

「もしよかつたら家に来ない?」

「え?」

「外に未練は無いでしょ? だったら一緒に暮らしたいかなーって」

「俺は助かるけど、良いのか?」

「うん。今日は迷い家に行く日だから、藍様達に紹介もできるし」

期待の籠った眼に射ぬかれる。

「……迷惑じゃないなら」

「全然! 決まりだねっ、行こう!!」

そう言うとき橙は手を引っ張って俺を立ち上がらせると、そのままギリギリ着いていける速さで走り出した。

「拾ってきた場所に戻しなさい！」

「いやです！ 一緒に住みます！」

「わがまま言わない！」

「もう決めました！ 面倒はちゃんとみるから！」

「そう言っつてウサギの面倒は私が見たじやないか!!」

「藍さまのイジワルっ、もういいよ!! 紫様に挨拶しに行こう、時命  
！」

「こら、まだ話は終わってないぞ！ 橙、待ちなさい！」

捨て猫扱いされてないか、これ？

### 第3話

狐の耳と尻尾が付いている美女を置き去りにして、橙に手を引かれて奥へと進む。

長い廊下を進んで居間に着くと、そこには立派な紫色の炬燵があった。

もう大分暖かくなってきてはいるのだが、布団はとらないのだろうか。

「紫さま。お話しがあるのですが、少し良いですか？」

「その必要はないわ、話は聞いていたから」

その声は、妖艶な感じがするも何処か少女を想起させるような、なんとなくお婆さんの様な気もするような、そんな印象を受けた。

「藍はああ言ってるけど、私は良いと思ってるわよ」

「本当ですかっ！」

「ええ。外人人なんて久しぶりよ。ましてや幻想郷に残ろうとするなんて何時振りかしら」

炬燵から聞こえるその声は、嬉しそうでもあり哀しそうでもあった。

「ただ、分かっているわね？幻想郷における注意事項等は貴女が教えること。八雲に連なる式としてしっかり責任をもって面倒を見ること。藍は貴女が説得すること。出来るわね、橙」

「うう、藍さまの説得は難しいよお……」

「しようがないわね、耳を貸しなさい。アドバイスしてあげるわ」

「本当ですか！ありがとうございます、紫さま！」

「うわっ！なんだこれ」

突如橙の耳の所に、端にリボンのついた裂け目が現れる。その裂け目からは多数の目が覗いており、凄く不気味だ。

しばらく何事かを聞いた橙は、お礼を言ってから何処かへと駆けていった。

「その貴方、此方へいらっしやい。炬燵のなかは快適よ」

「は、はい」

「あ、襖は閉じておいてね」

呼び掛けに応じて炬燵に入る。

中は言われた通り快適であり、むしろこれ以上に人間にとって最適な環境など無いのではないかと、そう思わせるほどのモノだった。

「どう、凄いでしょ」

「はい。こんな快適な炬燵は初めてです」

「ふふーん」

表情は分からないが凄くドヤ顔をしていそうだ。

「えっと、俺の名前は億意時命といいます」

「私は八雲紫よ。橙の主である藍の主といったところね」

まあ、種族が違うようだから、親子ではないとは思っていた。しかし、藍さんと橙はまだ分かるけど、紫さんと藍さんはどういう経緯で知り合ったのかは気になる。

「紫さんは炬燵の妖怪ですか?」

「ぶっふおー!」

盛大に吹く音が炬燵の中から聞こえてきた。

「え?今の私炬燵の妖怪に見えるの?」

「炬燵しか見えなかったのてつきりそうなのかと。違うみたい、ですわね」

「うっそおー」

正直なところ、炬燵しか見えてなければそういう発想にもなると思う。名前もややこしいし。

立場が逆でも同じなんじゃないかな。

「酷いなあ、自分で言うのもなんだけど、私美人なのになー」

俺には判断不能なんですわ。

「ほらほら、私の手スベスベで気持ちいいでしょ」

「んんっそんなところ触ったら汚いですよ」

「良いじゃない減るもんじゃないしー。それに汚くなんてないわよ」  
「っ」

「ビクビクして面白いわね。思ったより遅しいし」

「んっやめっ」

「コラア!!何しとるカアアアあああ……ん?」

襖を勢い良く開いた藍の瞳に飛び込んできた光景は、炬燵に片足を突っ込んでのたうち回る男の姿だった。

「やーねー、そんなに鼻息荒くしてどうしたのかしら」

「……何をしているの?」

「何って、見ての通り足を擦ってるだけよ」

「……」

ようやく解放された時命は、息絶え絶えながらも足を炬燵から引き抜いて部屋のすみに逃げる。

「ナニをしていると思ったのかしら」

「……」

「ナニを想像したの?ねえ、ねえねえ?」

「う、う、うわああああああん!!」

顔を真っ赤にした藍は叫びながら何処かへと走り去っていった。

「あれ、藍さまどうしたんだろう?」

少し遅れてやって来た橙は、藍が走り去った方向を不思議そうに見る。

「あの子はちよつとエツ」

「きつと鍋に火をかけたままにでもしてたんだよ多分」

追い打ちをかけようとした紫の言葉を遮る時命。

「藍さまはそんなミスしないよ、藍さま凄いんだから!」

「新しい修行方法でも閃いたのかもしれないな」

「そうかも!ちよつと聞いてみるね!」

そう言うや否や、橙はまだ微かに聞こえている声の方へと向かっていった。

「二人つきり、だね」

面倒事を増やされそうだと思った時命はその場を逃げ出した。

「ちよつと用事思い出す」

「行かせないわ！」

「うっっ」

が、一歩踏み出すと同時に足を捕まれてしまい、勢いよく倒れ込んでしまう。

うつ伏せになっっている時命の背中に誰かが乗る感触がした。

「ごめんなさいね、ちよつとだけ大切な話があるの」

仰向けにさせられた時命の目に飛び込んできたのは、孫を心配するような表情をした美少女だった。

「うーん、やっぱり素敵快適スキマ炬燵はいいわあ」

「紫様、動かないでいると太りますよ」

河童と共同開発した炬燵に潜っていると、洗濯物を取り込んだ藍に怒られる。

「その時は肥満との境界を弄るから問題ないわね」

「ええ〜……。今日は橙が来る日ですよ。示しがつかないのでは？」

そういえば今日だったっけ。あの子には思うところもあるけれど、私達ですら目を見張る程の直感と素直さは好きなのよね。

「あの子は良い感じに解釈してくれるから大丈夫よ」

「全然大丈夫じゃないですよねそれ」

「細かいことばかり気にしていると老けるわよお婆ちゃん」

「ソレを言ったら紫様なんてミイラじゃないですか」

失礼な。まだ若いし、全然イケてるわ。こちとらピチピチのナウでヤングなプリチーギャルよ。

「心も見た目もセンスも少女だからセーフね。完全無欠の美少女よ」

「自分で言うことですかそれ」

「事実だから良いのよ」

「まったく……」

最近の藍はお母さんみたいね。あの子を式にしてから本当に変わったわ。

元々はマヨヒガで暮らしていただけの普通の猫だったのに、気付いたら猫又になっていて孤独な毎日を送っていた子だった。——まあ、生まれを考えたら当然の帰結だったのだけど。

動物と触れ合うことで少しは丸くなると思ってマヨヒガに通わせていたのだが、予想の斜め上に行ったのは嬉しいやら悲しいやら。

これが本当のキレたナイフというやつだろう。

「ただいま戻りましたー!!」

気付いたら時間が経っていたのだろう。橙が帰って来て藍が迎えに行った。

「……？」

何時もなら橙が走ってくる位の時間が経つても何も聞こえて来ず、気になってスキマを開くと、

「拾ってきた場所に戻しなさい!」

藍の大きな声が聞こえてきた。

うっさあ……。

と、げんなりしながらも覗いてみると橙の隣にあまりパツとしない男が立っていた。

話を聞いてみるとどうやら橙がこの男と暮らしたがっており、藍が認めないという状況のようだ。

橙が認めたのなら特に問題はないものは思うけど、万が一のこともあるわよね。ちよつと記憶の境界をいじって人物の確認をしようかし

ら。悪い影響が出そうなら、そうねえ、どうしようかしら。

と、藍を置き去りにして此方へと向かう橙達を見ながらも後のことを考え、最悪の場合は気付かれないように排除することも考慮する。

そして橙がやって来ると、ただ子供が親に甘えるだけのやり方を教えて時命と二人きりになり、足をつかんで安全に心の境界を操作して記憶に強く残る過去を覗き見るのだった。

## 第4話

その日は制服から着替える暇もなく病院へと向かっていた。

両親が働いている会社でトラブルがあり、急遽海外へ出張することになったことで、入院している妹へ必要なものを持っていけるのが自分しかいなかったからだ。

リニアモーターカーに乗るために駅へ向かっていると、普段世話になっっている親戚のお爺さんから着信があった。

「時命か!? 今何処に居る!」

「どうしたんだよ爺さん、そんなに慌てて」

「直ぐに家に来て欲しいんだ、来れるか!」

爺さんは酷く狼狽した様子で大声で叫んでいた。

「今から妹の見舞いに行くと」

「それよりも大事な話があるから来てくれ!」

「分かったよ」

一体何の用事だと言うのだろうか。

「落ち着いて聞いてくれ。親御さんが乗っていた飛行機が……、墜落した」

その言葉から先はあまりよく覚えていない。ただ、漠然と妹は自分が守らなければいけないと、中学生ながらもそう思っていたことだけは確かだった。

報告してくれた爺さんが妹共々引き取ってくれた二年後。高校に

入学してからしばらく、始めたバイトにもようやく慣れてきたある日のこと。

バイトが終わって真っ直ぐ自宅に帰ると玄関のドアの鍵が開いていた。

不審に思っただけで警察に連絡しながらドアを開けると、鉄のような酷い臭いが充満していて、急いで臭いの強くなる方へと向かっていった。

リビングで見た光景は、赤く彩られた床と、動かなくなった爺さんだった。

後に、犯人は空き巣狙いの強盗で、爺さんのその手には両親が遺してくれた妹への誕生日プレゼントのネックレスと遺産の入ったクレジットカードが強く握られていたことが分かった。

ある日妹の調子がよくて、外出が出来た。

捨てられていた猫を妹が助けたがっていた。

後日、検査をしてから綺麗になった猫を妹に見せに行った。

妹がトウと名付けた。橙と書くらしい。

一カ月後、衰弱していた内蔵のうち肺がとうとう動かなくなり、妹

は安らかに息を引き取った。  
翌日の卒業式は休んだ。

その後三年はトウと一緒に各地を転々としながらもなんとか暮らしていた。

しかし、どんな時も一緒にいたトウもいきをひきとった。

ろうすいだった。

みんないなくなった。

——しぬのってこわいなあ

知らないところにいた。今までののは夢だったのだろうか。

何だか死ぬのは怖い。

もう助けられないのは嫌なんだ。

助けるつもりが助けられてしまったと思っていたら、逆に感謝されていた。

こんな俺でも、誰かの役に立てるのかもしれない。そう思えた。

——認めてくれるヒトがいたんだ。

——守ろう。絶対に。

(……………大丈夫、そうね)

不覚にも泣いてしまいそうで、間違っても藍達には見せられない顔をしてしまっていた。

昔から弱いのだ。何に、とは言わないけれど。

——認めましょう

——幻想郷の住人として

——そして、家族として

「ごめんなさいね、ちょっとだけ大事な話があるの」

こちらを向かせた時貞の顔には、不思議そうな表情が浮かんでいた。

「その前に言うことがあったわね」

「ようこそ幻想郷へ。我々は貴方を歓迎するわ」

もちろん、家族としても。

恥ずかしくて言えないけどね。

## 第5話

「それで、大事な話ってなんですか？」

「橙と結婚するには条件があるの」

「なんの話ですか？」

「一体このヒトは何を言ってるのだろうか。」

「まず私のことはママと呼びなさい。敬語も要らないわ。そうね、子供は流石にまだ早いかしら」

押し倒されたあと、話があるからと向かい合って炬燵に入ったのだが、これが大事な話だったのだろうか。早く橙のところに行きたい。

「あ、初夜の前に」

「席外しますね」

「やーね、少しだけ冗談よ」

席を立とうとするも肩を抑えられた。その顔は先程までとは違い真剣なものだった。

「少しは想像がつくと思うけど、話というのは貴方のことについてよ。時命、橙に依存しているってこと、分かっているわよね」

凶星だった。橙が居なくなれば、俺はまた理由を失うだろう。

ただ、それを表に出したつもりはなかった。

「自覚があるなら構わないわ。止めますで変わることもないし、生ある者は少なからず何かに依存するものだから。でもね、それ以外の世界にもちゃんと目を向けて欲しいの」

「だって、誰かの幸せを願うのは貴方だけじゃないんだもの」

「……覚えておきます」

「ええ。今はそれで十分よ」

満足そうに頷く紫さん。

「でも、何時までも内に籠ってたら外に引きずり出しちゃうから。覚悟してね」

——はい。

「それで、橙と一緒に住むことについてなのだけれど、貴方の暮らしていた所とは生活も生物も異なるから、色々修行させてもらおうわよ。い

いわね?」

「はい」

必要ならば是非もない。

「詳細はまた後でね。話はそれだけよ」

橙のところへ行くこう。

「あつ、まだママって呼ばれてないわ!戻ってきなさい!」

……。

「時命は家族としてこの家で一緒に暮らすことになりました。パチパチー」

「お待ち下さい紫さま。確かに橙と二人きりにするよりは大分マシだとは思いますが、それでは橙がお願いした一緒に暮らすとは違ってしまうのでは?」

橙を探して回るも見つからず、仕方なく居間に戻ると全員集まっております、紫さんが唐突にそう宣言した。

「橙もここに住めば万事解決ね。山籠りは無期限休止よ」

「みんなと一緒に暮らせるんですか!!」

橙の尻尾が凄いことになっている。皆と居られるのが余程嬉しいらしい。

「藍。貴女もまだまだ感情制御が甘いわね」

こつちも尻尾がわっさわさしていた。

——表情が変わらなくとも態度に出るのは、なんだか爺さんを思い出すなあ。

「とりあえずは生活に慣れてもらって、その後に最低限妖怪から身を守る術を学んでもらうわ。そうしたら橙と一緒に外出も出来るでしょう。幻想郷の案内もその時にね」

特に異議はなかった。

「家事は橙に教えてもらいなさい」

「任せてください！」

全身を使つて元氣良く返事をする橙。

「他は……そうね。藍、頼んだわ」

丸投げしたな。

「何時ものことではありませんけど、面倒になると全部こつちに寄越しますよね」

「そのための式だもの」

「少しは動かないと本当に太りますよ」

「もう太ってたわ。能力あつて良かったー」

そう言いつつ茶菓子に手を伸ばす。

「……」

藍さんは頭を抱えてしまっていた。

しかし、もはや慣れているのか、額に手を当てつつも指示を出し始める。

「橙、家事は昔のように手分けしようか。分担表は後で作っておくよ。時命はそれを手伝うように。午後に修行の時間を設けるが、橙は現状の確認から始めて時命は薪割り等から始めようか」

「はいー」

「わかりました」

「あ、藍。お風呂はもう沸いてるわよね」

炬燵の上に上体を寝かせて羊羹を食べながら話しかける紫さん。

だらけ過ぎではないだろうか。

「はい、何時でも入れますよ」

「なら橙も時命も疲れてるだろうし、ちやつちやと入って来ちやいな  
さっ」

紫さんがそう言うと、藍さんは橙と俺を見比べる。

「そうですね。……橙、先に入って来なさい」

「んー、時命が先で良いよ。疲れてるでしょ?」

「その気持ちはありがたいけど、俺は後で良いかな」

「むむむ」

藍さんが悩んだ理由も、最終的に橙を先にした理由も分からないほど鈍感ではないし。

「そうだ、一緒に入ろう時命!」

ん??

「あら、良いじゃない」

「いや良くないですよ紫様!?橙、時命は男なんだから、その、一緒には入らない方がいいと思うぞ」

「んん?男だと何で駄目なんですか?」

「うっ……と、時命からも何とか言ってくれないか!」

こつちに振らないで下さい。何も言えませんかから。

「言い考えだと思っただけどなあ」

「ぐっ……」

悲しそうな橙の姿に罪悪感があるのか、呻く藍さん。

後になってこの時に口を挟んでおいた方が良かったと後悔した。

「……うううううう!わかった!私と一緒に三人で入るぞ!」

「やったー!」

どうしてそうなる。もっと頑張って下さいよ。形だけ厳しくしてても実際は物凄く橙に甘いですよね藍さん。

そう思いながらも、顔を赤くしつつも喜ぶ橙を見て微笑む藍さんと一緒に、嬉しそうに二人の手を握る橙に連れていかれる。

「え？私だけ除け者？」

寂しく吹き抜ける風。世界を淡く照らす月明かり。一人取り残される私と楽しそうな三人。そこには世界を隔てる壁があるかのような錯覚を――

って、感傷に浸ってる場合じゃないわ！何で私だけ寂しい思いしなきゃならないのよ！

「待ちなさい！私も一緒に入るわ！」

能力を使うことも忘れて走り寄る。

「紫様まで来たら流石に狭いですよ」

「能力で広くすれば問題ないわ、私も一緒に入るんだもん！」

「だもんって、子供ですか……。全く、普段もこれぐらい行動的なら……」

何やらぶつぶつ言っているが、私には関係ないことだろう。

呆れてるよう藍も、楽しそうな橙も、魂が抜けてるような時命も、全員巻き込んで騒ぎながら風呂場へ向かっていった。

## 第6話

幻想郷で暮らすことになってから数日がたった。

この家で住むことになった次の日から藍さんと橙の手伝いを始めて、昨日までに洗濯や掃除、料理など一通りの事は行い、大体の事は一人でも出来るようになった。

洗濯は洗濯機を使った。洗剤は樹から採取して加工したものを使用して、電気の代わりに妖力で動いてゐるらしい。

古いタイプではあったがなんら問題なかった。

——あわあわー！

——橙!?!一本入れちゃだめでしょ！

調理に関しては竈や囲炉裏等を使用する方法がメインであったため、勝手が分からずに凄く苦労した。

数ヶ所火傷したのは特段不器用だったからでは無いはずだ。

——ふあいあー！

——ちえええん！家ごと燃えちゃうから！

——あつ、焦げてる

掃除機のみならず、雑巾と箒による拭き掃除と掃き掃除は思ったよりきつかった。全身筋肉痛だ。

——藍さまー！こっちは終わりましたー！

——あ、藍。この前頼んだカステラひやつ！

——紫様!?!つて、廊下がビショビショじゃないか！橙、雑巾はしっかり絞ったのか!?!

他の事も含めて思い出していると、昔の道具を使った方法と現代的な道具が混在していることが多かった。道具が一番新しいものでも

二十世紀後期から二十一世紀初頭ぐらいの物であり、古いものでは三千年以上前から存在する全自動薪割り斧という代物がある。

それにしても、橙の失敗の多さは少し気になるところだ。細かいミスも含めると十分に一回はしていたような気がする。

全体としては手際は良いのに、何故なのだろうか。

「橙、どうしたの？失敗が多いけど、何かあったの？」

縁側に座って休んでいると、藍さんの柔らかな声が微かに聞こえてきた。

藍さんは橙と二人きりだと雰囲気から何まで穏やかになるのだ。前に紫さんが覗いていたときに知った。

「いえ、何かがあったという訳では無くて、その、時命に良いところを見せたくて頑張ったんですけど……」

「張り切りすぎて失敗しちゃったのね」

「うう、はい……。ごめんなさい」

「どうやら、やる気が溢れてマイナス方向に突っ走ってしまったらしい。」

「カツコ悪いところ見せちゃいました……」

まあ、否定は出来ないかな。……でも、悪くない。

「うーん、そうだね。そこは否定できないかな」

「頼れるようなお姉ちゃんになろうと思ったのに、これじゃ無理かな……」

……何か頼れそうなことを見つけておこう。

「まだ十分挽回できるよ。何時も通りやれば出来るんだから、すぐに分かってくれるよ」

あまり盗み聞きするのも憚られる気がする。

仕方ない、紫さんの所に行ってみよう。

「やだ、私に会いたくて来ちゃったの？存在するだけで若い男を誘惑するなんて、私って罪な女ね」

「やっぱり間違いだった。」

「ノリが悪いわね」

「良くする必要がないからな。」

「まあいいわ。私のところに話しに来るなんて、何かあったの？」

「いえ、特に。気の迷いです」

「後悔している。」

「気の迷いって、失礼ねっ全く。」

「変な気の使い方を止めることさえしてもらえば、そう思わなくて済むのに。」

「んーそうねえ……。藍の好きなものはお揚げで、橙はマタタビ、みたいな？。」

「想像してた狐と猫の好きなものそのものだな。」

「イメージ通り過ぎてもはや嘘臭く感じますね……。で、紫さんのは言わないんですか？」

「あら、私のも聞きたい？」

「？はい。紫さんの事、知りたいですから」

「目を丸くする紫さん。どうしたのだろうか。」

「……………はあ。多分無意識なんでしょうね、それ。ま、良い傾向だわ。最初の頃は周りに興味なんて向けてなかったし」

「盛大にため息をつきつつも柔らかな笑みを浮かべる。」

「そうね。私の好きなものは……」

「あつ、幻想郷以外でお願いします」

「それはもう分かっている。」

「……………じゃあ」

「あ、橙達と博霊の巫女も無しで」

まだ会ってから数日だけど、耳にタコが出来る程聞いたからな。

博霊の巫女にいたっては、会ったこともないのに性格や交遊関係まで把握してしまった。

「……………そうねえ」

「炬燵と蜜柑も除外しておきましょう」

今も目の前にあるし。

「……………。な、何でそんなに把握されてるの？」

「自分の行いを省みてください」

「いやよ」

子供か。

「私の嫌いなことは」

「反省と自制ですよね」

「うそ……、私の特徴、把握され過ぎ!？」

「全部自分で言ってたじゃないですか」

幻想郷がどれだけ大切なのか、藍さんと橙のことをどれだけ思っているのか、博霊霊夢がうんぬんかんぬん。

近くに居るだけで聞かずとも湯水のように出てくるみんなの良い所悪い所。

どんな話をしていても何処まで本気なのかが分からないけど、こんなところで変に取り繕うヒトでもないだろうから相当好きなんだろう。

藍さんに叱られたときにも反省はしないわと言ってたし。

「そ、そうだったっけ？まあ、いいわ。うん。……何か恥ずかしいわね」

このヒトも恥ずかしいと思う事があったのか。

紫さんは扇子で顔を隠すも赤い耳が少し出ていた。

「それで、ここでの生活は慣れたのかしら？藍は手際の良さを褒めてたけど。あ、蜜柑食べる？」

あからさまな話題転換だが、あえて意地悪をする理由もない。

「ありがとうございます。少しは慣れてきたと思います」

「それなら妖怪から逃げ切るための訓練もぼちぼち始めようかしら。」

明日からいけそう?」

願ってもないことだ。今のままでは橙の足手まといにしかならぬい。

「はい」

「それなら準備しようかしら。ちよつと行つてくるわ。あつ、これ藍に渡しておいて」

返事を聞いて楽しそうにしている紫さんが、ビニール袋を置いてスキマへと消えていった。

消える間際に見せた何か企んでいそう笑顔が不安を煽る。まあ、気にしてもしょうがないか。

炬燵の中でも蜜柑を食べながら外を見ていると、橙と藍さんが居間へとやつて来た。

「ふむ、紫様がいると思つたのだが何処にいるか知らないか?」

紫さんがいないことを確認した藍さんが話しかけてくる。

そして橙がその後ろに隠れていた。

先ほどいなくなつたことを伝えて袋を渡すと、橙に何事か囁いてから何処かへと向かつていった。

しばらくその場に佇んでいた橙は、おもむろに動き出して袖をつまんでくる。

「頑張るから、見ててね!」

そう宣言した橙の顔はやる気に満ちていた。